



今年の2月号でコロナウイルスを話題にしたが、どうやら最悪の状況になってきたようだ。終息するどころか拡大し続ける脅威は尋常ではない。地球規模での感染は人類の滅亡をも想起させてしまうほどだ。

世界はあれやこれやと対策に追われてはいるが、マスクひとつが自由にならないという現実、先が見えない不安に拍車をかけてくる。有効な治療法が見つからないままの手探りの予防に明け暮れる毎日の心労は嵩むばかりである。

今一番望まれることは、一刻も早く有効なワクチンが開発され、落ち着いた日常を取り戻すことであろうが、コロナウイルスが消えてなくなるわけではないだろう。かつてサーズやエイズがそうであったように、共存するための道を歩んでいくしか方法はないかと思われる。数百種類あるというウイルスの種類、様々に変容をしながら生き続けているともいう。新型コロナもまさにその一つなのであろう。

万物の霊長と言われる私たち人間。その人間は同時に自然を壊し続け、地球上の生物の命を脅かし続ける人間でもある。その自覚のないまま将来において、地球上の一生物として生き残れるものであろうか。今この危機的状況の中において驕りを捨て、あらゆる生物との共存のための努力こそ、私たち人間に求められている最重要課題ではないかと、考えさせられたことだった。

## ある質問から

今月は記事の投稿がありませんでしたので、先日ある「門徒から受けた質問」に答えさせたいたく形で記事の掲載とさせていただきます。その「質問」については、「往生の意味がよく分からないから教えてほしい」とのことでした。

しかしながら「往生」については、宗派、学者によっても受け止め方が違うこともあり、簡単には説明しきれないところもあるのですが、まず「往生」という言葉がまずどんな場面で使われるのかをお聞きしました。すると少し間をおいて「行き詰まって困った時とか、人が亡くなった時に使うかな」と言われたのです。

確かに世間ではそのように使われていますが、「往生」というのは「生まれ往く」と読むことができますよね。その意味を少し考えてみてくださいますかと申し上げました。

すると「ごいへ生まれて往くのやな、ひよつとしてお浄土かな」と答えられました。「そうです」というと、「いつ、死んでからかな、死んでからのことみたい分からんと思ふんやけどな」と、いよいよ核心の話になってきました。

私たちは生きる上において様々な悩みを抱えて生きていますが、その悩みが死んでから解決されても、今を明るく幸せに生きることができなければ意味がないように思われますが、どう思われますか。「そろそろやな」

ですから私たちは生きています、仏法を聴聞し、どんなことがあっても変わらない壊れない幸せに生きることが大切だと思つのですがいかがでしょうか。「往生」とは私が生まれるという意味もありますが、私が住んでいる世界が、自我へのこだわりによって汚されている世界から清らかな世界になるという意味もあるのですよ。

真宗では「平生業成」(へいぜいごうじょうじょう)という言葉があるように平生において往生することが人生の目的とされています。お念仏に包まれて生きていける安心の人生に感謝して生きていきたいものです。「ああ、そうかな。ようわからんけど、やっぱり念仏かな」

そうですね。「念仏 成仏 これ真宗」と申します。



「満天星ついで」その後

本堂改修工事以来ずいぶん弱って主幹は枯れてしまいましたが、脇の枝が何とか復活。今年はきれいに咲きました。枯れた主幹はかつての様子がわかるよう一部残しました。



かつては本堂屋根より高いくらいでしたが...

報 徳 会 勤

今年は「コロナの影響もあつて、四月十五日(水)午前のみ安八の浄満寺でお勤めがなされました。左の写真は御代前にかけられた「教如上人」のご絵像です。



教如上人については以前の通信で紹介させていただきましたが、来年は光受寺が当番寺院になることから、大まかではありますが再度、紹介させていただきます。

教如上人って？

関が原合戦直前、教如上人は関東からの帰り家康の内通者として西軍石田勢に森部の光顕寺で襲われ、辞世の句を詠むほどの危機に遭遇しました。

一この難を救った門徒たちに対して東本願寺直参という特別の待遇と「土手組」の名称を与えその労をねぎらわれたのです。

家康から京都烏丸7条に寺地の寄進を受け、東本願寺を創立された初代です。

一門徒の中には蓮如上人の代わりに教如上人が掛けられているお内仏もあります。

南奈間にお飾りしました。



お迎えしました。

四月二十七日(月)本年当番寺院だった浄満寺さんへお迎えに行きました。

光受寺代表で責任役員の方のT・Yさんと光受寺十日講役員の方のH・Uさんにお世話になりました。

今月の掲示板

「おかげさま」と

言える人生に

孤独はない



今年亡くなった同級生からいただいた何か必死に叫ぶ像。参詣者と呼ばれていた人から思えます。

「おかげさま」

私たちは数限りもない「陰の力」をいただきながら生かされているのです。このことは少し思いを巡らしてみれば、気づかれることも多いと思いますが、普段はなかなか意識(上)して「ないよ」と思います。



「おかげさま」とは多くの繋がりの中で生かされているという私の自覚の上に発せられる「感謝」の言葉ではないかと思えます。この私も誰か、何かの陰となって繋がっているということなのでしょう。だから心をみくはなはずなのです。

「生きているだけで、誰かを幸せにしている」そんな実感をもつ生きるとはなんと幸せなのでしょう。

学習会・茶話会の中

「コロナウィルスの終息が思いのほか長引いています。終息がいつ頃になるのか見当が付きませんが、今月まではお休みします。

来月から再開できたらと思います。

新聞原稿募集中

口頃の思いや趣味、得意料理、旅先で出会った珍しい物、や〜となど、写真だけでも結構です。インスタ感覚で投稿よろしくお願いたします。